

ブドリの伝記

宮澤賢治の詩『雨ニモマケズ 風ニモマケズ』は一九三一年(昭和六年)の晚秋に岩手県の花巻で書かれた。この年、東北地方は記録的な冷夏に見舞われ昭和初期大凶作のはじまりとなつた年である。1929年に始まつた世界恐慌が翌年の昭和の大恐慌となり不況のどん底という時代背景と東北地方の風土を背景に描かれたものである。来年の生誕百年を前に気象の状況と世相に奇妙な共通点が見られるか、杞憂に過ぎないのだろうか。

賢治6歳の一九〇一年(明治三五年)からはじまつた明治末期大正大凶作は、二十歳の学生の時に天保以来で最悪といわれた大正一年(一九三五年)の大凶作となつた。過去百年間で平成五年の大凶作を含む東北四大凶作の残り全てが集中するこの時期、花巻や盛岡で多感な少年青年時代を送つた賢治は、凶作の惨状を心の奥深くに刻み込み、気象へ深い関心を抱き生涯にわたり冷害と対峙し続けた。

一百十日の九月一日から始まつて、一百二十日の『嵐』の章でおわるガラスのマントを纏つた『風の又三郎』銀河系のまつただ中へ夜汽車を走らせ、地球の時空間から銀河の異次元の幻想空間への接点において「天氣輪の柱」の丘から旅立たせた『銀河鉄道の夜』冷害と対峙して実践体験を高らかに歌つた『霜風は河谷いっぱいに吹く』の五九行の詩は、冷害長雨で痛めつけ

られ、雷鳴と稻光の中で倒れ伏す稻の惨状、対策に奔走する作者、やがて嵐は遠のき、和風が上がるという、絶望から歓喜へと急転回する自然との戦いが早いテンポで描かれて興味が尽きない。

賢治の化身とも思える若きブドリを登場させて気候改変の夢を託してイー・ハトーヴの世界を冷害から救い波乱の生涯を終えるという『アスコブドリの伝記』は六〇数年前に書かれたと思えないような斬新さがある物語である。イー・ハトーヴの森に生まれ、凶作とそれに続く飢饉で両親は死を秘めて森に消え、残された妹とも生き別れとなつたブドリが流転のすえに火山局の助手として働き、再び襲い来る冷害と飢饉を防ぐために、自らの若き命と引替えに火山の噴火工作を行い、炭素ガスを噴出させて大気を温め、冷害から人たちを守るというシナリオである。科学観や死生観を折り込んだ最も魅せられた物語の一つである。

この作品には『アスコブドリの伝記』といふ三割ほどの長い先駆型の初期異稿があり、このほうが科学的な表現が豊かである。『家離散』となつた時の冷害は次のように語られている。「その年はお日さまが春から変に白くぼんやりして、いつもなら雪がとけるとすぐまつしろな鳩のやうな花を一杯につけるマグノリアという樹も蕾がちよつと膨れただけ、五月になつてもたびたび霰がふり、……。今年は北の海はまだ氷がいつもの五倍もあつて、それがいまはじの方

からとけてイー・ハトーヴの東の方へどんどん流れだしている。……それは夏になつても、向暑さがこないために去年播いた麦もまるで短くて粒の入らない白い穂しかできず、たいていの果実は花が咲いただけで小さな青い実が粒のまま……秋になつても栗の木は青いからばかりでしあしみんなでぶだんたべる「一番大切なオリザ(稻の学名)という穀物が一つもできませんでしょ……」(宮澤賢治全集(ちくま文庫)第八巻)

そして終章はブドリ一七才の春、一家離散した年と同じほどの夏の寒さがやつてくるという測候所からの予報で始まる。ブドリの師、フイ・ボ・大博士をして「干魃ならなんでもないが寒さとなると仕方がない」宿命的な言葉が語られた賢治。五月がすぎ六月となつても寒さが残り焦燥がこうじて嘆願するブドリ。「きみがどうしても(夏の寒さから救う)あきらめことができないのか。それではここにたつた一つの道がある」。火山を噴火させて、地球の上層の気流に炭酸ガスをまぜて、地球全体の温度の放散を防ぐ。計算によると温度を七度あげることができる。もし上層気流の強い日に爆発させるなら瓦斯はすぐ大循環の風に混じて地球全体をつつむだろう。」温室効果偏西風の強いときを狙つた大気大循環による拡散と深い知識を総動員しての計画を大博士に語りせている。「しかしそれはちょうど猫の首に鎗をつけにいくやうな相談だ。あれが爆発すると時はもう通げるひまも何もないのだ」と死との引替えを暗示する。

かくして 数日のうちだんだん暖かくなつてとうとう普通の作柄」となつて冷害から救われたのである。みんなブドリのために喪章をつけた旗を軒ごとに立てた。

科学の世界と仏教の捨身の世界との接点がそこにあつたように思える。イハトーヴ 番の火山学者に 「あなたは直觀で私は學問と経験であなたは命をかえて私は命を大事にしてイハトーヴのために働く」と學問の専門家と実踐的な直觀で知を越えて本質に迫るブドリとの対比を語らせた。賢治自らをこの物語の中に投影して描いていたのではなかろうか。